清水随求堂〔清水寺西門の内にあり。本尊随求尊、天竺仏、■仏の腹内に安置す。脇士は多門、吉祥の二天を左右にす。享保の初め盛松阿闍梨の建立なり〕轟橋〔田村堂の前にあり。実は此橋にあらず。今三年坂の下に一流の渓川あり、これを山の井の渓といふ。いにしへは清水の乾より霊山惣門の前に至る道ありて、此渓川に架す橋をいふなり。むかしは此渓深ふして大いなる桟橋なり。著聞集にも見へたり。所謂長嘯橋も是ならんか〕

尾振谷〔清水の南、清閑寺の間、東西に通りたる谷なり。清水寺境内官府宣の中に、南は限二尾振谷一の文あり〕

南蔵院〔瀧の下にあり、本尊虚空蔵、菩薩は聖徳太子の作、座像一尺余。当院むかし大和国内山にあつて主膳寺と号す、皇太子の妃主膳の皇后の母阿比丘尼の草創なり。後世こゝにうつす〕

〔此所に鮑貝の酒器ありて、来客其大器にて酒を一息中に飲するものを最一とし、酒■を出して其名を記す。故に此酒器の名を浮瀬といふ。酒に乗じて浮み游ぶの謂ならんか〕

九重丹楓〔清閑寺高倉院帝陵の側にあり、此帝紅葉を愛し給ふ事平家物語に見へたり。後西院の御製宸筆の和歌清閑寺にあり〕

此君紅葉を愛して

うす霧の立まふ山の紅葉ばはさやかならねどそれと見てけり　　御　　製

秋葉社（あきはのやしろ）〔同所山上にあり、高倉院紅葉を愛し給ふゆへこゝに祭る。岷江入楚箒木巻に曰、秋は龍田山より事おこりて紅葉を詠ずるゆへに、秋を染る神といふなりと云云。世俗秋葉山三尺坊と思ふは謬なり〕獅子口〔此山を嵯峨渡月橋のうへより見れば、獅子口の形に似たるとて此名あり〕要石〔当寺客殿の庭にあり、此石上より洛陽の万戸を見れば扇を敷たる如くなりとぞ〕

覚明水〔当寺坂路の下にあり。元当寺は比叡山の末院にして三千坊の内なり、大太夫坊覚明（かくめい）世を遁れてこゝに住しならん〕

六条院陵（ろくでうのゐんのみさゝぎ）〔帝陵記云、東山清閑寺（せいかんじ）にあり、詳ならずと云々。山槐記云、治承五年正月十四日新院（高倉）已に崩御ます。今夜邦綱卿の清閑寺の小堂に渡御し奉る。抑是は六条院の御墓所の小堂なりとぞ。帝王編年記云、安元二年七月十七日新院崩御ます、御年十三歳、六条院と号す、是二条院の皇子、同廿三日乙丑東山の辺に葬り奉る〕

花の頃三室院僧正清閑寺の山荘によるとゞまりて、

明て後朝花といふ事をよみ侍し、

延年寺辻子（えんねんじのづし）〔清水寺六坊の側より西大谷に至る細道なり。此道の南に谷ありこれを延年寺谷といふ。■嚢抄曰、坂上田村麿鹿を獵て此山に来り奇異流水を見る、今延年寺谷といふ所なり。即源を尋て瀧の下に至る〕

〔東鑑（あづまかがみ）曰、建仁三年七月十六日、在京の御家人等を催遣し、東山延年寺に於て播磨（はりま）守頼全（らいぜん）を窺ひこれを誅戮せしむ。盛衰記云、清水寺（きよみづでら）合戦に、永万元年寺僧今は防ぎ戦ふに力なく、赤築地（あかついぢ）延年寺（えんねんじ）二ツの閑道へぞ落行ける〕

〔本願寺伝記云、東山の西の麓鳥辺野（とりべの）の南のほとり、延仁寺に葬し奉る云々。愚按ずるに、親鸞（しんらん）聖人御葬送の時は、最早此寺頽廃して無常所の地名となる、俗称して仁と謂伝ふならん。譬ば今万寿寺（まんじゅじ）通を万ジャウジ、又は建仁（けんにん）寺町をケンネジ町といふが如し〕

日親廟塔（にっしんのべうたふ）〔鳥辺山にあり、本法寺の懸所なり。同寺十世日通上人霊夢を蒙り、日親（にっしん）真筆の題目塔を掘出す。今廟所にあり。日親は、姓は平氏、長亨二年九月十七日八十二歳にて寂す、法義の為に苦辛して世に鍋冠（なべかむり）日親といふ〕

通妙寺（つうめうじ）〔同所にあり、法華宗妙伝寺に属す。開基日惣（につそう）上人、寛永年中に草創す。是より二町許東に近年妙見堂を建る〕